

語り続け、伝えつづけ

——北澤博史さんを悼む——

高良 真木

『二つの祖国—ある中国残留孤児の証言』の著者・北澤博史さんが2月24日、小田原の病院で亡くなった。昨年の春頃から調子が良くないと伺っていたが、入退院をくりかえし、とうとう逝かれてしまった。

1940年、5歳の北澤博史少年は、両親と姉二人、弟三人といっしょに満洲信濃村開拓地に入植した。

1945年4月、母病死、7月には父が召集された。42歳の老兵は戦うことさえなく、シベリアに抑留された。8月の日本敗戦、14歳の長姉を頭に、孤児となった6人のこどもたちを襲った苛酷な運命—地元民衆の襲撃、引揚げ船が来るといふ松花江岸の方正への逃避行、飢えと寒さに冒されて下の弟を失い、たまりかねて捨ててきた開拓地へ、極寒の大晦日、生き残った開拓民と戻り、身を寄せたもとの使用人の手から、姉弟バラバラに売られてゆき、8年の歳月を経て、ようやく日本に帰りつく。(二人の姉が中国人の夫と子供たち、またその子たちと帰国するまでには更に数十年の歳月が費やされた)

『二つの祖国』に通底するのは、開拓民、とりわけ子供たちの受難の理不尽さである。満洲に行けば広大な土地が手に入ると言われて行った先の“開拓地”は、実は中国農民が耕作した畑地であり、二束三文で買いあげた土地から農民たちは追い払われていたのだ。開拓団のこどもたちはその事実を知る由もなかったばかりか、学校では満州国の国旗を描かされ、日満漢蒙韓五族協和の国と教えられていた。なぜ開拓民—日本人だけが難民となって追い立てられるのか？ こどもたちは日本国からも日本軍からも見捨てられたばかりか、身に覚えのないその罪業をも背負わされ、“日本鬼子”とのしられて、生きなければならなかった。

国に捨てられ、言葉を奪われた状況の中でも、孤児たちは「子供ながら見るべきものは見ていた。それは何が正しくて、何が正しくないのか、変貌していく大人たちの態度から、浪費や怠け、嘘つきや追従など、真似てはいけないうちを見て学び、保身につなげ、孤児たちは必死に生きのびたのだった。

『二つの祖国』に添えられた109枚の挿絵には、不思議に凄惨さが無い。道端に石ころのように重なりあって捨てられている子供たち、「拾われて、売られて、また捨てられて・・・生きていれば、きっと、いつか、どこかで逢える・・・」。山中の集団自決、というより銃殺だった・・・「死んで魂だけ連れて帰るからな・・・」「祖国に帰ったら、必ず伝えておくからな・・・」画面から立ちあがってくるのは、生きとし生けるものへの、切ないまでのいとおいしさである。

戦争のことなど知らない、忘れてしまいたい、そう思っている人が多いことを北澤さんは知っている。それでもなお、半世紀前におこった惨事を語りつづけ、伝えつづけていかなければならない、と言う。生きて帰れなかった孤児たちの魂の声を、あなたは語り、伝え続けた。

北澤博史さん、いま語り終えたあなたの安らかな魂に、心からありがとう、申し上げて、永のお別れと致します。

(こうら・まき：画家、1930年生れ。1953年コペンハーゲンでの第2回世界婦人大会に出席後、ソ連、中国を訪問。1966年以後、画業の傍ら、日中友好運動に携わる。現在、日中友好神奈川県婦人連絡会会長、神奈川県日中友好協会副会長)